

# 水と文学

(8)



前東京都水道局理事 小泉 智和

「土地の人はなぜかそこが“はげ”と呼ばれるかを知らない。“はげ”的野長作といえば、この辺の農家に多い荻野姓の中でも、一段と古い家とされているが、人々は単にその長作の家のある高みが“はげ”なのだとと思っている。・・・」

大岡昇平の「武蔵野夫人」の書き出しだす。

古き良き時代の武蔵野、国分寺崖線の“はげ”、そして狭山丘陵の村山貯水池が舞台となっています。

著は、古き家柄に生まれ結婚した貞淑な人妻道子を中心に、夫、近くに住む父親の甥夫婦、そして浮虜生活から帰ってきた年下の従弟の勉等が綾なして、姦通、別離、離婚、相続、自殺といった物語の展開をします。

この小説は、大岡昇平が、昭和23年1月から11月まで、小金井市の富永次郎（成城学園の同級生）宅に寄寓して、書きあげたものです。発表されたのは、昭和25年で、当時のベストセラーになり、映画化されました。

## ○ 大岡昇平の世界

大岡昇平は、明治42年3月、牛込区（現新宿区）新小川町に生まれました。両親は和歌山県出身で、父は株の仲買人、母は元芸妓であったといいます。

渋谷で少年時代を送りますが、当時東京郊外の渋谷は「宇田川町のこの一帯は、水が豊富なことで特徴づけられる。恐らく道玄坂方面の台地の地下水脈があったのだろう、深さ2メートルぐらいの浅い井戸から、水が絶えず湧き出て、低い井戸を一杯にし、溢れていた」と大岡は語ります。彼の作品「幼年」「少年」には、「水脈」、「水源」、「川」、「用水路」、「湧水」等、水に纏わることが多く描かれていますが、アスファルトジャングルとなった今日の渋谷からは、想像もできません。

京大仏文科卒業後、日仏酸素、川崎重工業などに勤務します。

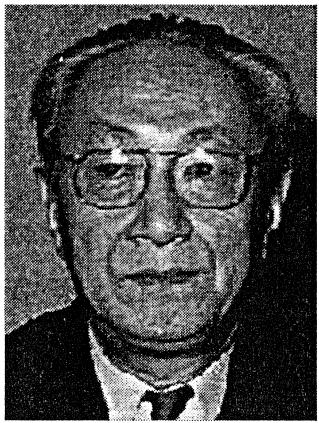
昭和19年、35歳で召集され、妻子を残してフィリピン戦線に出征します。ミンドロ島でマラリヤに罹り、米軍の捕虜に

なります。

昭和23年に書いた、自己の戦場経験「俘虜記」で第1回横光利一賞を受賞、同25年「武蔵野夫人」を書き、同27年「野火」で読売文学賞を受賞しています。

その後、「レイテ戦記」、「花影」等多くの作品を発表します。

昭和46年、芸術院会員に選ばれます、 「過去に俘虜になった経験があり、国家的名誉を受ける気になれない」と辞退します。その彼は、昭和天皇が重態になった昭和63年の暮、12月25日脳梗塞発作で他界しました。享年79歳でした。



大岡 昇平

### ○ 「武蔵野夫人」の舞台① はけ

昭和20年代の“はけ”がどうであったか、著は次のように伝えます。

「勉がことに興味を持ったのは、“はけ”的前を流れる野川であった。やはり宮地老人が所蔵していた五万分の一の地図を調べて、この小川が以前彼が高等学校時代成城学園の高台の下で見、また“はけ”へ来る前に寄寓していた田園調布の友人の家の下を流れる川の上流であ

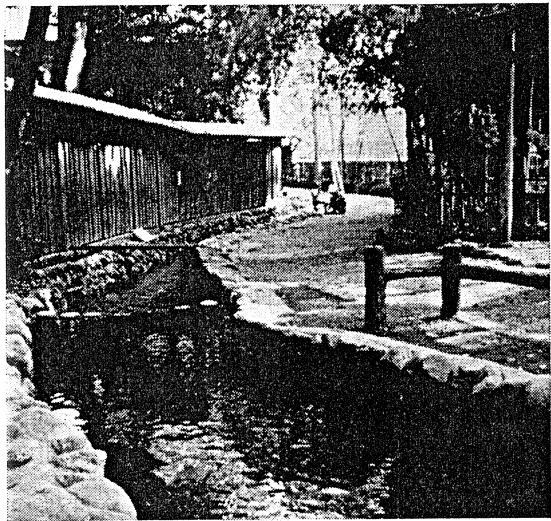
ることを知った。成城や田園調布では川は3間ほどの幅であったが、幅に似合わず豊かな水を疎水のように急速に運んでいた。水が蒲田から六郷に到る水田を潤すものであることは疑いない。

“はけ”的前面で野川は約1間の幅でほとんど橋もない田中の小川であったが、水はやはり不相応に豊富であった。地図によると川は国分寺駅附近の線路の土手の下から発し、“はけ”に続いた斜面から湧水を集めて来るらしいが、2糠足らずの間にこれだけの水量に達するのは、不自然に思われた」

大岡は、「湧水ふたたび」の中で、「昭和23年には、野川はこの辺では水量の多い農業用水という感じだった。富永次郎の長男一矢君に聞くと、子供たちは“大川”といっていたという。東京の隅田川も、大阪の淀川も、河口近くは大川という。奇妙な一致だが、野川は“大川”的感じはない。しかし国分寺段丘からの湧水その他を集めた主流ではある」と、語っています。

当時、東京、とりわけ郊外の多摩地域には多くの、また豊かな湧水が見られました。しかし、高度経済成長と共に、やがてこの地域も市街化され、アスファルト化されるに及んで、その湧水も失われていきました。

“はけ”的舞台となった国分寺から小金井あたりも、今日では僅かに真姿の池（名水100選・環境省）や日立研究所内池、貫井神社の池等しか湧水が見られなくなってしまいました。



国分寺・真姿の池湧水（「東京人」No. 135から）

### ○ 「武蔵野夫人」の舞台② 村山貯水池

道子は、夫が留守の、とある日、勉と国分寺から多摩湖線に乗って、狭山丘陵の村山貯水池に出かけます。二人にとっては、日帰りの予定が、嵐のため、ホテルに閉じ込められてしまいます。

当時、「南の谷を埋めた村山貯水池は、昭和初期の銀座文化にとって手ごろな遠出の場所であった。湖畔の同伴ホテルはその需要を充たすために生まれたものであるが、無論戦争中からさびれて、和洋折衷の異様な建物をいたずらに荒廃させているだけである。現在池畔を賑わすほとんど唯一の客である修学旅行の児童たちは、そういうところでは休まない。地形学の興味からここを訪れた勉は、無論ホテルの存在も知らなかった。

電車が“狭山公園”といわれる終点でとると、前方を50尺ばかり高く海鼠色

(なまこいろ) の堰堤が塞いでいるのが見えた。堤の下は芝生の間に徑をうねらせた現代風の公園で、ところどころ矮小な松が育っている。勉はそういう都市計画的造園の中を、撲ったいような気持ちで道子を導き、堰堤の尽きるところからジグザグの階段を上った。

水がそこに満々とたたえられてあつた」大正13年村山上貯水池、昭和2年村山下貯水池、そして昭和9年山口貯水池が完成しています。この貯水池は連結されているので、水道局では、総称して「村山・山口貯水池」と呼称しています。

この小説から、当時の貯水池風景が髣髴されます。

下貯水池の堰堤そばには、ぽつんと白亜のホテル（村山ホテル・昭和36年取り壊し）があり、広々とした芝地が広がっていたのです。大岡は、矮小な松が育っていると書いているので、彼の目には、まだ若木の桜が目に入らなかつたのかもしれません。

桜については、昭和10年に時計の精工舎2代目社長服部玄三氏から、1万本の寄付を受け、初代貯水池管理所長儘田吉之助氏が「日本一の桜の名所にしよう」と奮闘しています。その後、昭和34年、日本商工会議所会頭の足立正氏から2000本の寄贈を受け、今日では、貯水池周辺には5万本の桜があり、都内屈指の桜の名所となっています。

ところで、「武蔵野夫人」で脚光を浴びた貯水池を、観光地として大いに宣伝しようと、西武鉄道が毎日新聞に仕掛け、昭和26年、「観光地にふさわしい名称募集」を始めました。そして、名づけられたのが村山が「多摩湖」、山口が「狭山湖」でした。

今日、水道局は、昔からの地名で「村山・山口貯水池」、鉄道会社や観光パン

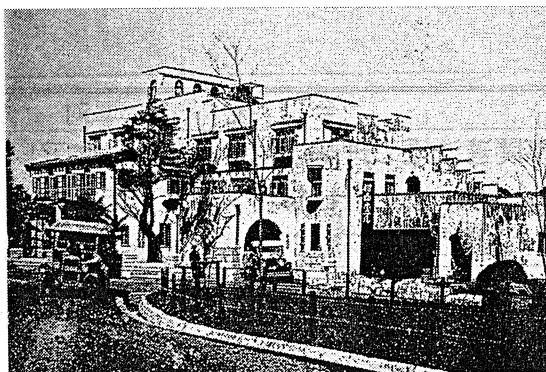
フレット等は、「多摩湖・狭山湖」と呼んでいます。

然して、阪神大震災の教訓の下に、昨年山口貯水池の堤体強化工事が完工し、本年から村山下貯水池の堤体強化工事が始まりました。

「武蔵野夫人」にみるのどかな武蔵野の風景、今は見るのが難しくなりつつあります。



貯水池でくつろぐ女優たち  
(昭和の初め頃・東大和市史資料編)



村山ホテル（同資料編）